

エマソンの *Nature* の曖昧性

— 一元論から進化論へ —

小 田 敦 子

要 旨

Ralph Waldo Emerson の *Nature* (1836) は、“human nature” を考える上で、科学的な自然観、とりわけ、進化論的自然観から発想された点で革新的である。エマソンが伝え続けた “the infinitude of the private man”、私人の「無限性」、つまり、「神的普遍的精神」は *Nature* では “Spirit” として論じられる。それは、エマソン生涯のテーマである “Natural History of Intellect” の「知性」に相応し、このテーマは、自然科学、とりわけ、ゲーテの『植物変態論』はじめ、エラズマス・ダーウィンの動植物学や、天文学や地質学など、進化論につながる科学的知見により、聖書 6000 年の世界観を更新し、1844 年の同題のエッセイで明示された “the secularity of nature”、人類を生んだ「広大な周期性を持つ自然」に基づく人間性を提示しようとする試みを表わしている。

自然神学を受け入れたユニテリアンの「改良」の思想が普及させた表現を用いる曖昧性は残るが、“The Rhodora”、“Each and All” など同時期の詩にはゲーテが鼓舞した有機的な全体として「生態系」的な自然のとらえ方が表現されており、1849 年版 *Nature* の題辞をネオ・プラトニストの言葉から、ゲーテの植物学から学んだ進化論的自然観を表す自作の詩に変えたことにも、*Nature* の現代的進化論への志向が読み取れる。

Ralph Waldo Emerson (1803-82) は 1836 年に匿名で *Nature* を発表した。“nature” という言葉が、元々、‘human nature’ のように、固有の性質を示す語であるため、また、エマソンはプルタルコス、モンテニョを尊敬する、人間性を考えるモラリストの伝統に位置づけられるエッセイストでもあり、晩年には「コンコードの賢人」と呼ばれアメリカの民主的精神の指導者として国民的イコンとして評価が確立したため、エマソンがユニテリアンの牧師を辞して後、生涯を通して行った講演でも、科学的事実の重要性を論じたにも関わらず、エマソン自身の「人格」の魅力の陰に、「科学」も「自然」も隠れてしまい、¹ 「自然」をタイトルにしたこのデビュー作でも、物理的自然そのものの価値が問題になることは少なかった。作品のタイトルは「自然」ではなく「人間」ではないか、あるいは、執筆の過程では、現在の第 6 章 “Idealism” までを 1 冊として、それと対になるもう 1 冊で “Spirit” を論じる予定のものを 1 冊にまとめたため、“Spirit” に至るエッセイのタイトルがなぜ “Nature” なのか、など、*Nature* は読者に謎をかけ続けている。近年では、アメリカのプラグマティズムの祖として位置づける哲学者としての側面に加え、奴隷制に反対する発言に注目した社会活動家の側面が論じられるようになったが、それらの思想を支える、当時の科学が明らかにした自然の事実に対してエマソンが抱いた関心については、看過されがちであった。²

古代ギリシア人の「汝自身を知れ」という思想に共感するエマソンにとって、*Nature* ももちろん人間性を知りたいという追究の一環であることに変わりはないのだが、そのためには、まず、自然を知ることの重要性を提起したところに *Nature* の意味、革新性はある。キリスト教の枠組みと葛藤しながら

らもその枠内にとどまる道を模索しつつ発達してきた近代科学の成果を、エマソンはキリスト教の世界観を変えるものとして受け止め、自然に基づく新しい宗教、精神性を求めた。ニューイングランドの伝統的キリスト教（カルヴァン派）から脱しようとする移行期の葛藤が、*Nature* の曖昧な用語法に表れている。言葉としては伝統的な“Spirit”を新しい観念として提言し、それに続く“Prospects”の章において、物理的な自然にも重大な意味があるということを、人間性と物理的自然が“nature”という同じ言葉で表現できることの意味を、現代的科学的な自然観で説明しようとしている。以下では、*Nature* 執筆に直接つながる 1832 年以降の日記や講演、1844 年のエッセイ“Nature”を中心に、エマソン自身の著作から、それを検証する。

I エマソン生涯の主題 — “Natural History of Intellect” —

エマソン自身が“nature”というタイトルの意味を説明するのは、「自然は精神のシンボルである」という言語論が語られる第 4 章“Language”で、以下の引用のように、人間は「ものと精神との間に相似関係を見つけるアナロジスト」であると言うところである。これは、自然は心象風景を描くために利用できるという主観的な意味ではなく、客観的な事実を扱う科学的自然観が精神を説明できると考えることを意味する。物理的自然を対象とする科学だけでは「単性」のようなもので、人間の精神と組み合わせてこそ価値があるという観点に立ち、自然の事実と「人間の本性 nature」の間に物理法則的なアナロジーが存在することを示すことが、エッセイのタイトルの含意であると説明している。

These are not the dreams of a few poets, here and there, but man is an analogist, and studies relations in all objects. He is placed in the centre of beings, and a ray of relation passes from every other being to him. And neither can man be understood without these objects, nor these objects without man. All the facts in natural history taken by themselves, have no value, but are barren, like a single sex. But marry it to human history, and it is full of life. Whole Flora, all Linnaeus' and Buffon's volumes, are dry catalogues of facts; but the most trivial of these facts, the habit of a plant, the organs, or work, or noise of an insect, applied to the illustrations of a fact in intellectual philosophy, or in any way associated to human nature, affects us in the most lively and agreeable manner. (“Chapter 4. Language” 21)³

エマソンは 1832 年に牧師を辞した後、半年余りヨーロッパを旅行しカーライルはじめ文人たちにも面会するが、帰国後 1833 年、講演者となって最初に選んだテーマは、“The Uses of Natural History”であった。この講演は科学者を対象としたもので、エマソンに「ナチュラリストになる」と決意させ、その後の著作の原動力となったパリの植物園でサソリの標本と自分自身との間に感じた“occult relation”（神秘的な関係），“strange sympathies”（奇妙な共感）がまず紹介される（*EL* 1:10）。自然の考察の重要性を語り、「現在の科学以上の科学」（*EL* 1:7）、つまり、台頭期にあるがまだ確立していない進化論の登場を予告するような発言もある。森に行き身体活動を伴う身近な植物学、鳥類学を行うことは、「心身の健康、有用な知識、喜び、精神と性格の改善」（*EL* 1:23）に資すると *Nature* 前半を構成するような話をしながら、大事なことは、自然の法を知り、それを人間の精神と結び付けることであると、*Nature* と同様の結論に至る。講演の最後は、従来の「自然は神の書いた本」という考えと似て非なる「神自身の歴史」という撞着語法、神の永遠性を天文学的に長い自然の歴史の時間で測り、神が歴史化されたかのような結語に至る。

… for herein is writ by the Creator his own history: If the opportunity is afforded him he may study the leaves of the lightest flower that opens upon the breast of summer, in the faith there is a meaning therein before whose truth and beauty all external grace must vanish, as it may be, *all this outward universe shall one day disappear, when its whole sense hath been comprehended and engraved forever in the eternal thoughts of the human mind.* (EL 1:26)

引用の最後の部分は、マクロコズムとミクロコズムの別が消えて、*Nature* を代表するイメージである私が「透明な眼球」(10)になる法悦的瞬間、外的な自然は消えて、「人間の精神の永遠の思考」が顕れると、こちらも人間の精神が永遠であるという撞着語法で説明される。神的な精神の人間への内在は、カルヴァン派からは異端視されながら、キューカー教徒の「内的な光」やユニテリアンの提示した神との近似の可能性からエマソンに継承され、エマソンがそれをさらに大胆に展開したことは、前述の「透明な眼球」に続いて、街よりは森にいると何かもって“*dear and connate*”(10)なものを見出すという言葉にも表れている。この“*connate*”が“*nature*”において似ている、気が合う」という意味で使われた例として、*OED*にはこの文が引用されている。この語の普通に使われる意味は「生まれもった」で“*innate*”と同じである。カルヴァン派の“*Innate Depravity*”(生まれながらの堕落)という教義に対抗して、意識的に選ばれた言葉であろう。エッセイ“*The Poet*”においてエマソンは人間の精神を自然と結びつけた言葉で表現することで人々の意識を変容させる詩人を「解放する神」(461)と呼ぶように、ここでもカルヴァン主義から精神を解放し、人の永遠性を表現できる言葉を模索している。

神的な精神は至高の「知性」と言い換えられ、自然と精神とのアナロジーを考えることをエマソンは、「知性の博物学」と呼ぶ。*Essays: First Series* (1842)中のエッセイ“*Intellect*”の冒頭の段落で、物質の変化を支配する力である「知性」が物質を通して考えられるべきことを、控えめに不定冠詞のついた“*a natural history of the intellect*”「知性の博物学」として提案した。1848年ロンドンで講演をした時にもそのタイトルで考えており、晩年にハーバード大学での連続講演のテーマに選んだのも、“*Natural History of Intellect*”であり、生涯の主題であったことがわかる(Richardson 449-50)。博物館、*the Museum of Natural History*は現代では、「自然史」博物館と訳されるが、このヒストリーには元々歴史の意味はなく、「時間にとらわれない自然現象の体系的記述」という意味である。「知性を自然現象として体系的に記述する」という試みには、前述の引用の「神の歴史」が暗示するように、キリスト教の精神史に人間を含めた自然の歴史の比重を大きく加えようとする意図があり、「博物学」が「自然史」と読み替えられるようになる背景にあると思われる進化論が強く影響していると考えられる。進化論は、「共通起源説」と「自然選択説」から構成されるが(小川 64)、共通起源をもってそれを進化論と言わずとも、「多様性の中に一つのもの」を見るという古代インド・ギリシア哲学の「同一性」の思想で十分ではないかという反論に対しては、以下のように「進化論」ととらえる利点を考えてみたい。

ダーウィンが進化論を書くときに、神の働きと同一視されるような表現を慎重に避けたように(長谷川 125)、物質主義的な話に限定することで、まず、「観念論者」とみなされているエマソンの精神性の革新的な面を明確にすることができるだろう。エマソンは雄弁な牧師であり、キリスト教的用語も豊かで、かつ、ダーウィンと違って、人がキリスト教的に理解するなら、それでよいという姿勢であったが、進化論的な物理的世界観を前提にすると、エマソンの神秘主義的あるいは超越主義的と抑

揃えられる文章が少し読みやすくなる。エマソンの詩には、自然の詩が多く、前述の講演の引用中の花への言及が示すようにゲーテの「植物変態論」をはじめ、科学的な事実に裏打ちされた自然への愛を表現するものが多く、エッセイも自然への愛を考慮すると、意図が明確になる。

Sensible objects conform to the premonitions of Reason and reflect the conscience. All things are moral; and in their boundless charges have an unceasing reference to spiritual nature. Therefore is nature glorious with form, color, and motion, *that every globe in the remotest heaven; every chemical change from the rudest crystal up to the laws of life; every change of vegetation from the first principle of growth in the eye of a leaf, to the tropical forest and antediluvian coal-mine; every animal function from the sponge up to Hercules*, shall hint or thunder to man the laws of right and wrong, and echo the Ten Commandments. Therefore is nature ever the ally of Religion: lends all her pomp and riches to the religious sentiment. (“Chapter 5. Discipline” 28)

これは、ケネス・バークを辟易させた、「星の輝く目をした幻視家のイメージ」(Burke 157) に彩られた超越主義の一例として挙げられたものだが、後述の進化論を念頭におくと、人間の精神を自然を基盤として考える「知性の博物誌」のヴィジョンが見えてくる。バークの慧眼は、この引用はエッセイの中間部でエッセイの到達点である“Idealism”と“Spirit”、“Prospects”への橋渡しになると指摘してもいる。エマソンの計画では、“Spirit”は“Idealism”までの部分と対になる別冊になるはずであったため、両者は共に精神論だが、違うものとして定義している。引用冒頭の“Reason”は「悟性」に対する「理性」であるが、自然との関係で“Spirit”と呼ぶものを、知的な用語で呼んだものだと第4章“Language”で説明される(21)。前出の‘Intellect’、あるいは、詩ではよく使われる“Genius”、これは“Self-Reliance”の根拠としても言及されるが(259)、これらエマソン独自の用語も同じく、神的な無限性に連なる力を指すもので、コールリッジ等の影響から先に進もうとするエマソンの新しい精神性、自然宗教への志向が垣間見える。ハロルド・ブルームはエマソンはアメリカの宗教を神への信頼から「自己信頼」に変えた、それはエマソンには同じものだと端的に述べたが(Bloom 145)、自己信頼の根拠になる神に代わる自然の存在についてさらに考えたい。

バークと同じような忌避感エマソンを脱超絶主義化した現在でも続き、以下の“Self-Reliance”中の自然への言及は、修飾的な比喩として読み飛ばされがち、あるいは、論旨を脱線させる躓きの石とみなされがちで、なぜ、人間が草やバラの前で恥じいらねばならないのか、植物と人間を比べるのもばかげている、など冗談のような比喩と受け取られかねない。

Man is timid and apologetic; he is no longer upright; he dares not say ‘I think,’ ‘I am,’ but quotes some saint or sage. *He is ashamed before the blade of grass or the blowing rose.* These roses under my window make no reference to former roses or to better ones; they are for what they are; they exist with God today. There is no time to them. There is simply the rose; it is perfect in every moment of its existence. (“Self-Reliance” 270)

しかし、やはり初期の講演“Naturalist”ではゲーテの類似の表現を引用して(“Naturalist” EL 1:72)、本気で、植物と人間はそれぞれに完全で、同じであると言おうとしている。これはダーウィンの進化論の思想でもある。前述の最初の引用にもあるように、人が中心であるとか、自然を利用するというよ

うな言い方が、人間中心主義と受け取られ易いが、次の引用は *Nature* 最終章で、パリ植物園での体験に触れつつ “naturalist” としての立場を説明する部分だが、人間の誇りをくすぐる “lord” という言葉を使うけれども、同時に、人間が優れているのではないと言う。

In a cabinet of natural history, we become sensible of a certain occult recognition and sympathy in regard to the most unwieldy and eccentric forms of beast, fish, and insect. ... Nor has science sufficient humanity, so long as the naturalist overlooks that wonderful congruity which subsists between man and the world; of which he is lord, not because he is the most subtle inhabitant, but because he is its head and heart, and finds something of himself in every great and small thing, in every mountain stratum, in every new law of color, fact of astronomy, or atmospheric influence which observation or analysis lay open (“Chapter 8. Prospects” 43-44)

初期の講演「博物学者」ではもっと単純に、‘head’ を否定して、動植物と人間との同質性を明言する。

But it is said that Man is the only object of interest to Man. I fully believe it. ... But it is the wonderful charm of external nature that man stands in a central connexion with it all; not at the head, but in the midst: and not an individual in the kingdom of organized life but sends out a ray of relation to him. So that all beings seem to serve such a use as that which is sought in comparative anatomy. We study our own structure magnified or simplified in each one. (“Naturalist” EL 1:71)

‘head and heart’ は人間の意識の比喩であり、周囲のものとの関係を意識する、意識の中心としての人間、後にエッセイ “Experience” が展開する、周囲から疎外され、意識を有するようになった人間の意識はエマソンの関心の中心であることが示されている。エマソンの意味は、イギリス・ロマン派以上に、自然を基にしてこそ、その意識の世界を拡大できるという「見通し」を示したことにある。

II Goethe の植物変態論から進化論へ

エマソンが “naturalist” になろうと決意し、科学への関心を深めていく時期は、詩人としての成熟期に重なる。1834 年には “The Rhodora”、“Each and All”、“The Snow-Storm” というアンソロジー・ピースが、*Nature* 発表の頃には “Xenophanes” が書かれる。このうち、カナダ・シャクナゲの花が主題の「ロードーラ」については、ヴァリオラム版 *Poems* の注釈がゲーテの「原植物」“Arch plant” からのメタモルフォシス論の影響を指摘している。ゲーテはダーウィンにも影響を与えたが、エマソンには詩人、文学者としての出発点になる非常に重要性をもっている。

ヴァリオラム版の注釈者は先行研究を紹介して、ゲーテとコールリッジからの影響である自然との「主観的な相互関係」、人間が自然の観察者であること、「目」の意味の重要性を挙げていくが、それとは独立した解釈もありうるとして、*Nature* の主張する「人間と植物との間の神秘的な関係」(11) にエマソンが感じる喜びとの同質性を指摘している (*Poems* 78-79)。この同質性は誰よりもゲーテが教えたものであることが次の日記の記述からわかる。

[April, 1834] *Nat. Hist gives body to our knowledge.*

No man can spare a fact he knows. The knowledge of nature is *most permanent*, clouds & grass are older antiquities than pyramids or Athens, then they are *most perfect*. Goethe's plant a genuine creation. Then they bear strange but well established affinities to us. Nobody can look on a cistus or a brentus without sighing at his ignorance. *It is an unknown America. Linnaeus is already read as the Plato who described Atlantis. A classification is nothing but a Cabinet. The whole remains to be done thereafter.* (JMN 4:282)

「博物学は知識に肉体を与える」、「ゲーテは新しい創造だ」、ゲーテ後の自然は「新しいアメリカだ」など最大級の誉め言葉で、新しい植物学の登場を歓迎している。1834年4月にエマソン一家はボストンの借家から夏を過ごすために自然豊かな郊外のニュートンに引っ越した。次に示す当時の日記には、リンネとゲーテを比べて、リンネの標本的分類の時代から、ゲーテの「メタモルフォシス」の植物学への転換、「原植物」から植物動物への変化をたどる進化論的なダイナミックな自然観への転換が語られている。

[3 May, 1834] *We have no Theory of animated Nature. When we have, it will be itself the true Classification. Perhaps a study of the cattle on the mountainside as they graze, is more suggestive of the inspection of their parts in the dissection-room.*

... these are natural classification containing their own reason in themselves, & making known facts continually. ... When shall such a classification be obtained in botany? *This is evidently what Goethe aimed to do, in seeking the Arch plant, which, being known, would give not only all actual but all possible vegetable forms. Thus to study would be to hold the bottle under water instead of filing it drop by drop. I wrote once before that the true philosophy of man should give a theory of Beasts & Dreams, or "the nocturnal side of Nature."* (JMN 4:288-89)

「山で草を食む牛」の研究が「生きて動く自然の理論」であると言う。それをふつう「分類」とは呼ばないが、エマソンはそれが「真の分類」だと言い、人間と動植物の分離、精神と肉体の分離という従来分類を無効にしようとする。この引用の最後の「獣や夢」は後述する *Nature* の序論でも、科学が今後明らかにすべき「自然の理論」として挙げられている。

「ロードーラ」は「生きて動いている自然」、「山で草を食む牛」の一つの例として、人も花も鳥も。それぞれの生き物が個別に共存する世界に、人が偶然その有機的全体性に気づく瞬間を語っている。

The Rhodora:

On Being Asked, Whence Is the Flower?

*In May, when sea-winds pierced our solitudes,
I found the fresh Rhodora in the woods,
Spreading its leafless blooms in a damp nook,
To please the desert and the sluggish brook.
The purple petals, fallen in the pool,
Made the black water with their beauty gay;
Here might the red-bird come his plumes to cool,*

And court the flower that cheapens his array.
Rhodora! If the sages ask thee why
This charm is wasted on the earth and sky,
Tell them, dear, that if eyes were made for seeing,
Then Beauty is its own excuse for being:
Why thou wert there, O rival of the rose!
I never thought to ask, I never knew;
But, in my simple ignorance, suppose
The self-same Power that brought me there brought you. (Poems 79)

ここには地水火風、植物、動物、人間の存在する、現代用語で言えば「生態系」が描かれる。それを存在させる原因を「神」とは言わず、Power と呼ぶ。ここにはたまたま人間がいるが、「賢人」との問答は、人間がいなくても存在する自然界を示唆している。鳥への言及は、単なる絵になる空想ではなく、水場に鳥が来るといふ経験による知識に支えられて動植物だけの世界を想像している。“To please”もその部分だけ読むとケネス・バークを悩ませた超越主義、或いは人間中心の感情移入、文飾のように見えるが、エマソンの文脈では、次に挙げる 1841 年の *Dial* に発表したエマソンの宇宙創造論である詩、“Woodnotes II” の初版の第一連で描かれる人間誕生以前の世界における「ものがものに払うやさしいひそかな助け」の言い換えであると考えることができる。

Light and heat, land and sea,
Spake unto the oldest tree.
Glad in the sweet and secret aid
Which matter unto matter paid,
The water flowed, the breezes fanned,
The tree confined the roving sand,
The sunbeam gave me to the sight,
The tree adorned the formless light,
And once again
O'er the grave of men
We shall talk to each other again
Of the old age behind,
Of the time out of mind,
Which shall come again. (ll. 31-44, *Poems* 104)

これを含む第一連全体は、エマソンが晩年周囲の人の力を借りて編集した *Selected Poems* では省略されてしまったいわゆる神秘主義的な部分だが、自然の事物で語った古代詩人を理想としたエマソンが古英語を模した詩型で、松の木を語り手として人間の誕生以前、以後の生態系を想像した、やはり進化論的な詩だと解釈できる。ダーウィンの「生存競争」という概念も、依存関係も含めて個体の生存と繁殖に関わるすべての要因を「競争」と呼んだという生態系的な概念だということであれば（長谷川 48）、*Nature* でも繰り返して語られる「風景 (Landscape)」への関心も、“Each and All” の詩が示す具

殻は水辺にあってこそ美しいという自然の法則が支配する「有機的な全体性」の現れへの関心と理解されるが、それも現代的な用語では生態系として捉える観点と言えるだろう。起源にある一つのものから変化を生じさせる流動的な「力」を何と呼ぶかという問題で、エマソンはより物質主義的な自然観に依拠していたと考えられる。

III 天文学・地質学から進化論へ— “the Secularity of Nature” —

もう一つ、進化論を考えることの利点は、この「ロードーラ」のように存在として完全性を保つ動物と人間は同じだという考えが人間の価値を下げるのではなく、エマソンが人々に伝えたい要点である、‘the infinitude of the private man’「私人の無限性」の根拠になりうるという点にある。

[April, 1840] *In all my lectures, I have taught one doctrine, the infinitude of the private man. This the people accept readily enough, & even with loud commendation, as long as I call the lecture, Art: or Politics; or Literature; or the Household; but the moment I call it Religion,---they are shocked, though it be only the application of the same truth which they receive elsewhere, to a new class of facts. (JMN 7:342)*

精神の「無限性」については、近くはルネサンス期のミクロコズムとマクロコズムの対応が一つの答えになり、球体の世界を見る人間の眼球は世界を捉えているという観念は、目を eye ではなく “eyeball” (10) と言ったエマソンにも継承されているが、進化論は「私人の無限性」に物質的な基盤を提供する。Nature の ‘Spirit’ の章で、「自然の最も高貴な務めは、‘the apparition of God’ としてあること、人を普遍的な “spirit” へと連れ戻すことだ」(40) と説明するが、‘Spirit’ を考えるには、物質を実体ではないと考える観念論では十分ではないと述べ、“Spirit” を以下のように人間の中にある “Creator” として定義する。

… that spirit creates; that behind nature, throughout nature, *spirit is present; one and not compound, it does not act upon us from without, that is, in space and time, but spiritually, or through ourselves*: therefore, that spirit, that is, the Supreme Being, does not build up nature around us, but put it forth through us, *as the life of the tree puts forth new branches, and leaves through the pores of the old. As a plant upon the earth, so a man rests upon the bosom of God; he is nourished by unfailing fountains, and draws, at his need, inexhaustible power. Who can set bounds to the possibilities of man?* (“Chapter 7. Spirit” 41)

“Spirit” は「一つのもので、合成物ではない」起源となる一つの存在であって、人間に内在する。“Supreme Being”、“God” と言い換えられるが、この “God” は、“Introduction” では、「自然」と呼ばれていた。

Why should not we also enjoy an original relation to the universe? … *Embosomed for a season in nature, whose floods of life stream around and through us, and invite us by the powers they supply to action proportioned to nature, why should we grope among the dry bones of the past, or put the living generation into masquerade out of its faded wardrobe? The sun shines to-day also. There is more wool and flax in the fields. There are new lands, new men, new thoughts. Let us demand our own works and laws and worship.*

(“Introduction” 7)

この一つ前の “Spirit” からの引用に「植物の生命」という言葉があるが、生命とはエマソンの重要語である “Becoming”、変化していく、成っていく力、流動的な力として考えると抽象的な法則のようなものだが、「一つで合成物ではない」と原子のような共通の起源となる物質を連想させる表現もある。人間の身体を同じ起源となる物質から作る生成力があり、それが世界の無限性につながっているという考えは、進化論の個体発生は系統発生を繰り返す、という考え方に近いだろう。それは初期の講演から続く、人間にも可能な無限の「創造の歴史」となりうる。

エマソンの伝記作者、ロバート・リチャードソンはエマソンが 1832 年 3 月に 1 年余りに亡くなった最初の妻の棺を開けて遺体と対面したことから話を始め、その後最初に書いた説教が “The God of the Living” であり、もう一つは天文学に関わるものであったことを例に、エマソンに起こった変化を死への集中からの解放、宗教との格闘への一つの結論とみている。1832 年 5 月の日記ではエマソンはまず天文学が明らかにした広大な宇宙と広大な時間の中にいる小さな人間という存在の仕方を基に、自身の宗教観を考えなおすことに解放感を感じている。

[May 1832] Indeed is truth stranger than fiction. For what has imagination created to compare with the science of Astronomy? ... *The contrast between the magnitude & duration of the things observed & and the animalcule observer.* It seems a mere eye sailing about space in an eggshell & for him to undertake to weigh the formidable masses, *to measure the secular periods & settle the theory of things so vast & long,* & out of the little cock-boat of a planet to aim an impertinent telescope at every nebula and pry into the plan and state of every white spec that shines in the inconceivable depths. ...

Who can be a Calvinist or who an Atheist[?]---

God has opened his knowledge to us to correct our theology & educate the mind. (JMN 4:24)

「事実は小説より奇なり」と科学的な観察に基づいた事実が明らかにした広大な宇宙と顕微鏡で見ないと見えない、一寸法師どころではない小さな人間との対比への驚きを繰り返し語っている。この広大な宇宙感覚は、18 世紀以来のハーシェル等天文学者の発見に加え、1830 年のライエルの *Principles of Geology* に結実する当時の最新科学であった地質学からの知見でも強化されたもので、最初の講演の大きなトピックであった。宇宙の広大な時間を、日記では “the secular periods” と呼び、次にあげる 1833 年 1 月の講演 “The Relation of Man to the Globe” でも同じ言葉で紹介している。

Now what is the conclusion from these hasty and to some it may appear miscellaneous sketches of the relation of man to the objects around him? I have spoken of the preparation made for man *in the slow and secular changes and melioration of the surface of the planet.* We have seen that *as soon as he could live upon it, he was created; that the air was mixed to suit his lungs* ... (EL 1:48)

この ‘secular’ は「世俗の」という意味ではなく、現代でも社会学など人文学では使われる「長年にわたる」という意味に近いが、現代では使われない、当時の天文学の用語で「永年の」「変化がゆっくりと極めて長期にわたって起こる」という意味で使われている。この形容詞を、1844 年の *Essays: Second Series* 所収のエッセイ “Nature” では、“the Secularity of Nature” と名詞化して、進化論的自然観を敷衍

する。

Geology has initiated us into the secularity of nature, and taught us to disuse our dame-school measures, and exchange our Mosaic and Ptolemaic schemes for her large style. We knew nothing rightly, for want of perspective. Now we learn what patient periods must round themselves before the rock is formed, then before the rock is broken, and the first lichen race has disintegrated the thinnest external plate into soil, and opened the door for the remote Flora, Fauna, Ceres, and Pomona, to come in. how far off yet is the trilobite! how far the quadruped! How inconceivably remote is man! All duly arrive, and then race after race of men. It is a long way from granite to the oyster; farther yet to Plato, and the preaching of the immortality of the soul. Yet all must come as surely as the first atom has two sides. ("Nature" 546-47)

引用文の3行目で説明するように「自然の長い周期性」という意味で名詞化された“secularity”はいわばエマソンの造語で、この語も *OED* に最初の使用例として採録されている。*OED* の“chronological order”という元々の編集方針は、エマソンがエッセイ“The Poet”で述べた言語の起源とその後の変容について、地質学の比喩を使ったアフォリズム、“Language is fossil poetry.” (457)、言語はある言葉が最初に使われたときの“poetic origin”の化石だという考えから発想された。当時、語源は「一生、一時代」である“secular”が「現代語」として天文学的な意味で浮上してきたことは、エマソンには衝撃的な発見、啓示的な出来事ではなかったかと想像できる。“secular”の来歴を考えると、語源にある「時代」が表す長期に始まり、それは「永遠」に対して「一時代の」つまり教会に対して「世間」「世俗的」と変容した意味として定着していき、エマソンの時代の科学が、聖書の6000年の歴史に代わる、広大な時間、人にとっては「永遠」と呼んでよいような広く深い世界を明らかにしたとき、「宇宙と原初的な直接の関係」(7)に立って、エマソンは宇宙大の時間を指して“the secularity of nature”と言った。これが「自然の世俗性」と理解されることを排除もしなかったというエマソンの「曖昧性」はあるにしろ、明らかなイコノクラズムである。

この“the secularity of nature”、自然が長い時間をかけて物質を変化させていくこと、無機物と人間と同じ物質から変化していったものと考え、私は「進化論」と考えているが、それを進化論と言う必要があるのかと疑問が呈される理由は、或いは、「原進化論」と控えめな表現になるのは、上の引用の最後の部分、「プラトンや魂の不滅性を説くところへ」という人間の精神が最終到達点となっていることが示すように、啓蒙主義の流れを汲むユニテリアニズムの改良の思想という側面にあるだろう。ユニテリアンは神を自然の設計者とする自然神学に好意的で、高名なチャニング牧師が唱えた人間と神との近似、“self-culture”による人格の改善、完成の思想をエマソンも受け継いでおり、純粋に科学的な自然観にみえないところがある。また、これは進化を改善だと考えがちな進化論自体に対する誤解でもあるが、たとえば、社会的ダーウィニズムの優良思想とエマソンを関係づけられることを避けたい、さらには、進化論を信じていないアメリカ人の多さなども関係しているだろう。しかし、エマソンの息子、エドワード・エマソンはCentenary Editionの“Nature”の注に、エマソンが古代ギリシア哲学から、古生物学者や生物学者による“Evolution”(E. Emerson 331)までを射程に入れていることを指摘している。引用は最後には「原子が二つの面をもつと同じく確実に、すべては生じなければならぬ」と結ばれ、それは古代思想というよりは、続く頁でJohn Daltonが登場することからも(548)、19世紀初頭に進展を見せた原子論への言及であるのではないか。次の引用でも科学の受容について、チャールズ・ダーウィンの祖父、ゲーテやワーズワース、コールリッジらロマン派に影響

を与えたエラズマス・ダーウィン（キング - ヘレ 277, 416）を再発見したらしいエマソンは、その考えが定着しなかったことに、いささか異議を唱えるのだが、その際にも、原子の事実としての確実さに言及している。

[May 29, 1834] *Dr. Darwin's work has lost all its consequence in the literary world. Why? Not from Currier nor from Brown. No. A dim venerable public decides upon every work. ... but the work presently takes its true place by no effort friendly or hostile, but by the real importance of its principles to the Constant Mind of Man. And this in a way that no individual can much affect, by blame or praise. It is the specific gravity of the atom.* (JMN 4:292-93)

エラズマスはリンネのラテン語を文字通り生殖に関わる表現もそのまま英語に訳し、1791年には植物を人間の恋愛に擬人化した一般読者向き科学詩集 *The Botanic Garden* を出版した。⁴ 詩集は2部構成で、*The Loves of the Plants* では生殖を「進化 evolution」の核心ととらえ、人間の感情は神学よりも生理学に関わっていると論じ、*The Economy of Vegetation* では、さらに物質主義の観点を社会や政治の分野に進めてその進化を例証している。引用で念頭にあるらしい医師としての代表作、*Zoonomia; or the Laws of Organic Life* (1794-96) は身体感覚を論じ、眠りや夢想、めまい、酔いのメカニズムを説明しようとする部分、精神病者を優しく扱うこと（キング - ヘレ 376, 54）なども、エマソンの注意を引いたと考えられる。引用中の大衆の決定権と作品の真の価値についてのコメントが示唆するように、一般人を対象に講演したエマソン自身も自身の講演内容については自然よりも人間に関心がある聴衆の理解との折り合いを考えつつ、最終的には客観的な事実の追求に基づいて人間の精神を考える立場に組ずることを目指している。人間の動植物性の考察は、ユニテリアニズムが採用しなかった啓蒙主義思想だが、以下の引用は *Nature* を書いたエマソンはそれを科学が解明すべき理論として、拾いあげたことを示している。

All science has one aim, namely, to find a theory of nature. ... Whenever a true theory appears, it will be its own evidence. Its test is, that it will explain all phenomena. Now many are thought not only unexplained but inexplicable; as language, sleep, madness, dreams, beasts, sex. ("Introduction" 7)

エマソンを超絶主義者の中でも進化論に最も近かったと論じるウィリアム・ロッシは、以下の講演を例に、自然を人間のために準備された家と言う点にユニテリアニズムの継承を指摘している（Ros-si 587）。

... I may say the most sublime, to wit, that *Man who stands in the globe so proud and powerful is no up-start in the creation, but has been prophesied in nature for a thousand and thousand ages before he appeared ... an effort, (as physiologists say), to produce him; the meaner creatures, the primeval sauri, containing the elements of the structure and pointing at it on every side, whilst the world was, at the same time, preparing to be habitable by him. He was not made sooner, because his house was not ready.* ("The Relation of Man to the Globe," *EL* 1:29)

この「家」の比喻も聴衆をエマソン自身のより科学的な思考に導入するためのレトリックと言える。こ

れを導入部として、人類の誕生以前の地球の歴史にふれ、最後にもう一度前述の「長い周期で起こる変化」への言及を含む引用のようにまとめることから、「家」の比喩は、“habitable”な環境、その環境への「適者生存」、つまり、むしろ、進化論の主張する「共通起源説」と「自然選択説」と解釈できよう。

Nature は最初匿名で発表され、その時の題辞には、ネオ・プラトニスト、プロティノスからの引用が使われていた。1849年に*Nature*が講演記録と合冊で再版されたときに、エマソンはそれを自作の詩に変えた。

A subtle chain of countless rings
The next unto the farthest brings;
The eye reach omens where it goes,
And speaks all languages the rose;
And, thriving to be man, the worm
Mounts through all the spires of form. (5)

冒頭の“chain”という言葉が、“the great chain of being”を連想させることも計算済みで、エマソンは従来の神を最高位として分割、序列化された世界を攪乱、ゲートから学んだ“true Classification”を試みている。プロティノスの一元論から、進化論への接近をより明示的にする変更であったと結論づけたい。

注

- 1 Cornel West の *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism* (1989) は Henry James, Sr. の次の言葉を引用している。“Mr. Emerson’ authority to the imagination consists, not in his culture, not in his science, but all simply in himself, in the from of his natural personality.” (9-10)
- 2 科学に焦点を当てた画期的な批評書、Laura Dassow Walls, *Emerson’s Life in Science: The Culture of Truth* (Cornel UP, 2003) は、主に文献学的な証拠を検証し、エマソンの進化論につながる先進性を指摘している。
- 3 本文中のイタリックは筆者のもの。以下の引用についても同様である。
- 4 Erasmus Darwin の著作については、*Wikipedia*、ウェブ版 *Britannica* の記事も参照した。

本研究は JSPS 科研費 (18K00413) を受けている。

引用文献

- Bloom, Harold. *Agon: Toward a Theory of Revisionism*. Oxford UP, 1982.
- Burke, Kenneth. “I, Eye, Ay—Emerson’s Early Essay, “Nature”: Thoughts on the Machinery of Transcendence—.” *Emerson’s Nature—Origin, Growth, Meaning*, edited by Merton M. Sealts and Alfred R. Ferguson, Dodd, Mead & Company, 1969, pp. 150-163.
- Dawkins, Richard. *Science in the Soul: Selected Writings of a Passionate Rationalist*. Random House, 2017. (リチャード・ドーキンス, 『魂に息づく科学—ドーキンスの反ポピュリズム宣言』大田直子訳 早川書房 2018.)
- Emerson, Ralph Waldo. *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*. 3 vols., edited by Stephen Whicher and Robert E. Spiller.

- . *Essays, Second Series. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Centenary Edition, edited by Edward Waldo Emerson, vol.3, Houghton Mifflin, 1903-4.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. 16 vols., edited by William H. Gilman, Alfred R. Ferguson, George P. Clark, et al. Harvard UP, 1960-82.
- . *Poems: A Variorum Edition. The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, edited by Albert J. von Frank and Thomas Wortham, vol. 9, Harvard UP, 2011.
- . *Ralph Waldo Emerson: Essays and Lectures*. Edited by Joel Porte, Library of America, 1983.
- King-Hele, Desmond. *Doctor of Revolution: The Life and Genius of Erasmus Darwin*. Faber and Faber, 1977. (デズモンド・キング・ヘレ. 『エラズマス・ダーウィン』和田芳久訳 工作舎 1993.)
- Packer, Barbara L. *Emerson's Fall: A New Interpretation of the Major Essays*. Harvard UP, 1982.
- Poirier, Richard. *The Renewal of Literature: Emersonian Reflections*. Random House, 1987.
- Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire: A Biography*. U of California P, 1995.
- Rossi, William. "Evolutionary Theory." *The Oxford Handbook of Transcendentalism*, edited by Joel Myerson, Sandra Herbert Petruionis and Laura Dassow Walls, Oxford UP, 2010, pp.583-596.
- Strauch, F. Carl. "The Year of Emerson's Poetic Maturity: 1834." *Philological Quarterly*, 34, Oct. 1955, pp. 353-377.
- Walls, Laura Dossaw. *Emerson's Life in Science: The Culture of Truth*. Cornell UP, 2003.
- West, Cornel. *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*. U of Wisconsin P, 1989.
- Woelfel, James. "'The Beautiful Necessity': Emerson and the Stoic Tradition." *American Journal of Theology & Philosophy*, vol. 32, no. 2, 2011, pp. 128-38.
- 小川真里子. 「ダーウィンの生物学」. 松永俊夫(編)『ダーウィンの世界 ダーウィン生誕 200 年—その歴史的・現代的意義』(学術会議叢書 17) 日本学術協力財団 2011 pp.59-82.
- 長谷川眞理子. 『ダーウィン 種の起源—未来へ続く進化論』(NHK 「100 分 de 名著」ブックス) NHK 出版 2020.

The Ambiguities of *Nature*: Emerson's Essay to Integrate Monism into Evolution

Atsuko ODA

Abstract

Ralph Waldo Emerson's *Nature* (1836) is revolutionary for its reliance on scientific views of material nature in discussing human nature. Emerson's life-long pursuit of the "Natural History of Intellect" shows that his belief in "the infinitude of the private man"—that is, divine universal spirit residing in human nature—was founded on those scientific facts which botany, including Goethe's and Erasmus Darwin's works, astronomy and geology had revealed, leading the way to Charles Darwin's theory of evolution.

Emerson calls the long history of evolution before man came into being "the secularity of nature" in his 1844 essay, also titled "Nature." The word "secularity" is his coinage. As he used the idioms of natural theology which is familiar to Unitarians and of their idea of amelioration of human nature, *Nature* is ambiguous. But the poems written at about the same time such as "The Rhodora" and "Each and All" as well as the motto to the 1849 version of *Nature* suggest that Emerson has a strong inclination towards evolution from the very beginning of his writing career.